序　文

明治八年九月二十四日、東京会議所は東京府知事大久保一翁宛に商法講習所の開学を次のように届け出ている。

「府下商法講習所ノ儀ニ付テハ先般上申仕候趣モ有之候処右ハ枢要ノ事件ニテ人民一般ノ鴻益可相成ニ付一同協議ノ上森有禮殿打合教師トシテ米人ホウキッニー氏ハ当会議所ニテ相雇差出候筈約定仕候間兼テ御渡有之候木挽町拾三番地内ニ於テ開業可仕ノ処営繕向未タ行届兼候ニ付当分ノ内仮リニ第一大区尾張町二丁目二拾三番地ニ於テ開業仕候此段御届申上候也」

この商法講習所がさまざまな形態変化をとげて今日の一橋大学となった。そこで昭和五十年は一橋大学創立百年を記念する祝典の年となった。このような機会に大学百年史を刊行することはよく見られることである。本学でも昭和三十九年、高橋泰藏学長は今日を期して一橋学園史資料整備委員会（委員長、故村松祐次教授）を設置された。しかしその後の学園紛争によって、この事業は中絶し、今日に至ってしまった。

昭和四十九年、図書館長であった私はこの記念すべき年に学園百年史が刊行できなければ、せめて附属図書館史を編集したいと、にわかにこの計画を立てた。したがって多少拙速の感のあることはおおい得ないが、御許しいただきたい。本格的な大学百年史の刊行は将来の課題として残されている。

しかし本学のように社会科学系の大学では、図書館は研究と教育の基盤であり、その発展の歴史を語ることは、また大学の発展の歴史の重要な側面を語ることになると信ずるものである。

本学の図書館が世界屈指の特殊文庫を収蔵していることは自他ともに認めるところであり、われわれの誇りとするところである。しかしながらこれが今日あるのは、本学内外の幾多の先人の苦心と努力の成果である。このことを、ささやかなこの図書館史によってあらためて偲んでいただければ、この上ない幸いである。後輩のわれわれにとっても新しい明日へ向かって励しを与えられる感がある。

昭和五十年九月二十四日

一橋大学長

小泉　明

付記　本書は、財団法人一橋大学後援会からの記念事業のための寄付金と本学教職員の寄付金によって刊行された。「概説」は本学図書館に四十数年在職された川崎操氏の稿になるものである。また本書の編集は館員清水末寿氏によるところが多い。記して各位に深謝するものである。